

I : 総括研究報告

総括研究報告書

薬物乱用・依存状況の実態把握と

薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究

研究代表者：嶋根卓也（国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部）

【研究要旨】本研究班では、わが国の薬物乱用・依存に関する最新状況およびその経年的変化を異なる対象集団に対する全国規模の疫学調査を通じて情報を収集するとともに、大麻や一般用医薬品の乱用といった近年、公衆衛生上の問題が拡大しつつある個別の課題について掘り下げることを目的とする。

研究計画に基づき、今年度は、以下の分担研究課題を実施した。

研究1：薬物使用に関する全国住民調査（2021年）

この調査は、一般住民における飲酒・喫煙・医薬品・違法薬物の使用実態を把握するとともに、その経年変化を調べることを目的とする。本研究は、わが国で唯一、定期的に実施されている薬物使用に関する全国調査である。対象は、層化二段無作為抽出法（調査地点：250）によって無作為に選ばれた15歳から64歳までの一般住民7,000名である。

※なお、次の研究課題は令和4年度のみの実施とする。

研究2：飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査（2022年）

研究3：全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査（2022年）

研究4：救急医療における薬物関連中毒症例に関する実態調査：一般用医薬品を中心に

研究5：米国における嗜好用大麻の合法化が邦人留学生の意識・行動に与える影響に関する研究

【主たる結果】研究1により、次の知見が得られた。

薬物使用に関する全国住民調査（2021年）を実施し、計3,611名から調査票を回収した（回収率51.6%）。重複回答や除外基準に合致する対象者を除いた計3,476名を有効回答とした（有効回答率49.7%）。対象者の平均年齢は43.8歳、男性47.4%、女性52.6%であった。各物質の使用状況は次の通りであった。

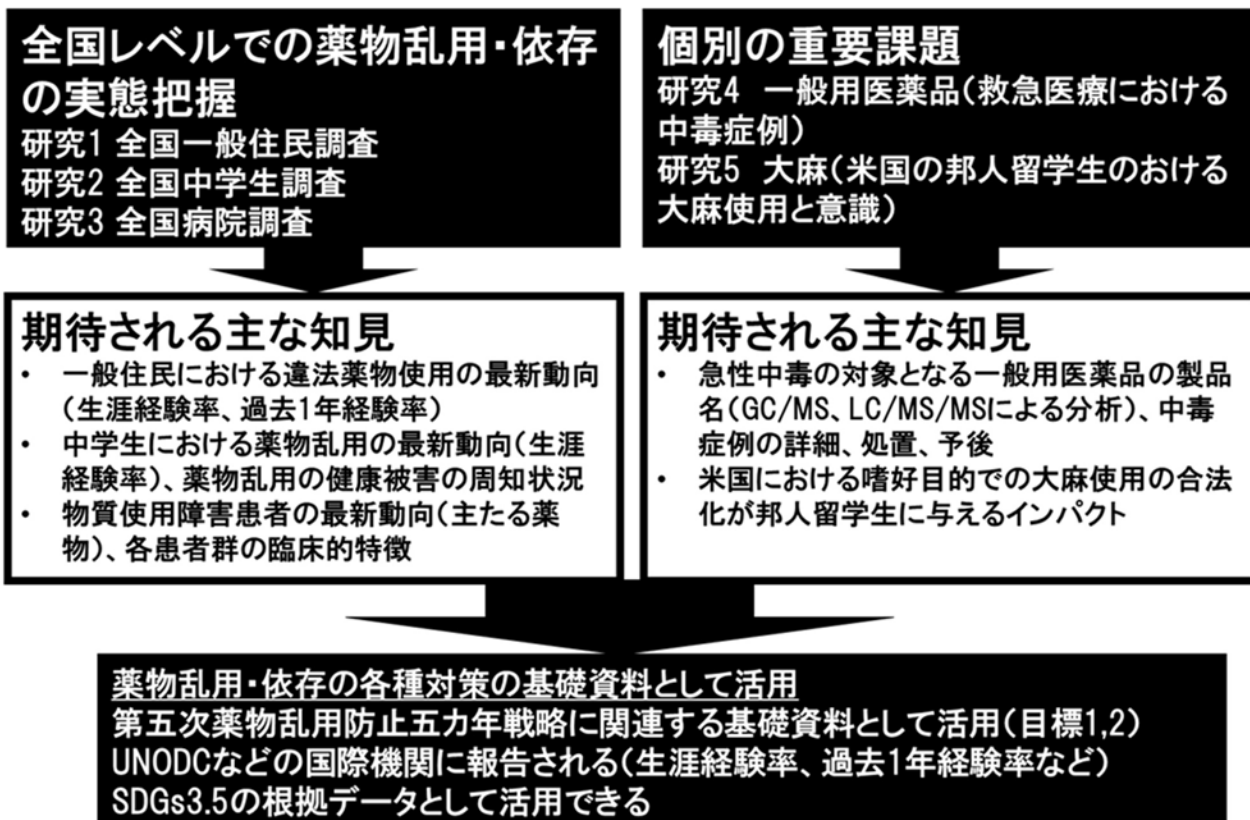
- 1) アルコール：直近の飲酒率（過去30日飲酒率、過去30日ビンジ飲酒率）は、男女ともに顕著に減少していた。
- 2) タバコ：過去1年喫煙率、過去30日喫煙率ともに、男性は横ばい、女性は減少していた。
- 3) 解熱鎮痛薬：直近の使用率（過去30日使用率）は、男女ともに急増していた。
- 4) 精神安定薬：過去30日使用率、習慣的使用率ともに女性は顕著に増加、男性はわずかに減少していた。
- 5) 睡眠薬：過去30日使用率は、女性は横ばい、男性は減少していた。習慣的使用率は、女性が増加、男性が減少していた。
- 6) 医薬品の乱用経験：過去1年以内の乱用経験率（者数）は、解熱鎮痛薬0.57%（約51万人）、

精神安定薬 0.43% (約 38 万人)、睡眠薬 0.09% (約 8 万人) と推計された。

- 7) 違法薬物：違法薬物の生涯経験率（者数）は、大麻 1.4% (約 128 万人) が最も高く、有機溶剤 0.9% (約 82 万人)、危険ドラッグ 0.5% (約 43 万人)、MDMA 0.3% (約 27 万人)、覚醒剤 0.3% (約 24 万人)、ヘロイン 0.3% (約 23 万人)、コカイン 0.2% (約 22 万人)、LSD 0.1% (約 13 万人) と推計された。過去 1 年経験率（者数）は、大麻 0.14% (約 13 万人)、ヘロイン 0.10% (約 9 万人)、危険ドラッグ 0.09% (約 8 万人)、LSD 0.08% (約 7 万人)、コカイン 0.08% (約 7 万人)、MDMA 0.08% (約 7 万人)、覚醒剤 0.06% (約 5 万人)、有機溶剤 0.04% (約 4 万人) と推計された。ただし、大麻とヘロイン以外の過去 1 年経験率は、統計誤差範囲内であった。
- 8) 大麻：2019 年から 2021 年にかけて過去 1 年経験者数が増加した（2019 年：約 9 万人、2021 年：約 13 万人）。大麻使用者の過半数は「国内のみ」で使用されていた。使用された形状は、乾燥大麻や大麻樹脂に加えて、ワックス・リキッドタイプ、大麻成分を含有する食品の使用も報告された。

【結論】新型コロナウイルス感染症が猛威を振るう中、第 14 回目の全国住民調査が実施された。2019 年から 2021 年にかけて一般住民の飲酒、喫煙、医薬品、違法薬物の使用状況に様々な変化がみられ、経年的な変化において新型コロナウイルス感染症が影響している可能性が示唆された。今年度の新たな試みとして、医薬品（解熱鎮痛薬、精神安定薬、睡眠薬）の乱用経験、および大麻の使用場所、使用形状に関する実態を明らかにすることができた。

○薬物乱用・依存の実態を全国レベル/複数のフィールドで調べつつ、個別の重要課題についても掘り下げていく



研究分担者

嶋根卓也（国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部、心理社会研究室長）

松本俊彦（国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部、部長）

上條吉人（埼玉医科大学医学部臨床中毒学）

Tooru Nemoto（Public Health Institute, U.S.）

A. 研究目的

有効な薬物乱用対策を進めるためには、薬物乱用・依存に関する実態を正確に、かつ継続的に把握することが求められる。第五次薬物乱用防止五か年戦略（2018年8月薬物乱用対策推進会議決定）においても、薬物乱用・依存の疫学的研究、薬物乱用・依存に関する意識・実態調査、薬物依存症・中毒者に対する支援の在り方に関する研究等を推進すると明記されている。また、再犯防止推進計画（2017年12月閣議決定）において、薬物依存を有する者への一貫性のある支援等が求められている中で、薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究が求められている。

本研究班では、わが国の薬物乱用・依存に関する最新状況およびその経年的変化を異なる対象集団に対する全国規模の疫学調査を通じて情報を収集するとともに、大麻や一般用医薬品の乱用といった近年、公衆衛生上の問題が拡大しつつある個別の課題について掘り下げることを目的とする。

具体的には、研究1「薬物使用に関する全国住民調査（令和3年度）」により、全国の一般住民における違法薬物の使用率（生涯経験率・過去1年経験率）および使用者数を推計する。研究2「飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査（令和4年度）」により、全国の中学生における飲酒・喫煙・薬物乱用の使用率（生涯経験率・過去1年経験率）および使用者数を推計する。研究3「全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査（令和4年度）」により全国の精神科医療現場にお

ける乱用薬物の動向、ならびに薬物関連精神疾患患者の臨床的特徴を明らかにする。研究1は1995年より、研究2は1996年より、研究3は1987年より継続して実施してきたモニタリング調査としての意味合いもある。

個別の課題については、研究4「救急医療における薬物関連中毒症例に関する実態調査：一般用医薬品を中心に（令和4年度）」により、救急医療施設に搬送される一般用医薬品の過量服用患者の実態調査：背景（服用した医薬品の商品名も含む）、症状、臨床経過、予後を調べるとともに、ジヒドロコデイン、メチルエフェドリンなどの依存性物質の定量分析などを調査する。研究5「米国における嗜好用大麻の合法化が邦人留学生の意識・行動に与える影響に関する研究（令和4年度）」により、米国における嗜好用大麻の合法化が、邦人留学生の米国滞在中および帰国後に想定される大麻使用行動に与える影響を質的・量的に検証する。研究費配分の都合上、各研究は単年度での実施となる。

研究計画に基づき、今年度は、以下の分担研究課題を実施した。

研究1

薬物使用に関する全国住民調査（2021年）

研究分担者 嶋根 卓也

国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所薬物依存研究部

A. 研究目的

「薬物使用に関する全国住民調査」は、一般住民における飲酒・喫煙・医薬品・違法薬物の使用実態を把握するとともに、その経年変化を調べることを目的とする。本研究は、わが国で唯一、定期的に実施されている薬物使用に関する全国調査である。1995年より隔年で実施され、今回で14回目の全国調査となった。得られた知見は、薬物乱用・依存に関する各種対策の立案・評価を講じる上での基礎資料として供する。

B. 研究方法

対象は、層化二段無作為抽出法（調査地点：250）によって無作為に選ばれた15歳から64歳までの一般住民7,000名である。事前にトレーニングを受けた調査員が、対象者を戸別訪問した。今回の調査は、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るう中での実施となったため、アンケート用紙の回収方法を①訪問回収（従来）、②郵送返送、③インターネット回答から選べるように変更した。調査期間は2021年9月22日から11月26日であった。近年の動向を踏まえ、医薬品の乱用経験（過去1年間）、大麻の使用場所、使用した大麻の形状に関する調査項目を追加した。調査実施にあたり、国立精神・神経医療研究センター倫理委員会の承認を得た（承認番号A2017-011）。

C、D. 研究結果・考察

計3,611名から調査票を回収した（回収率51.6%）。重複回答や除外基準に合致する対象者を除いた計3,476名を有効回答とした（有効回答率49.7%）。対象者の平均年齢は43.8歳、男性47.4%、女性52.6%であった。各物質の使用状況は次の通りであった。

- 1) アルコール：直近の飲酒率（過去30日飲酒率、過去30日ビンジ飲酒率）は、男女ともに顕著に減少していた。
- 2) タバコ：過去1年喫煙率、過去30日喫煙率ともに、男性は横ばい、女性は減少していた。
- 3) 解熱鎮痛薬：直近の使用率（過去30日使用率）は、男女ともに急増していた。
- 4) 精神安定薬：過去30日使用率、習慣的使用率ともに女性は顕著に増加、男性はわずかに減少していた。
- 5) 睡眠薬：過去30日使用率は、女性は横ばい、男性は減少していた。習慣的使用率は、女性が増加、男性が減少していた。
- 6) 医薬品の乱用経験：過去1年以内の乱用経験率（者数）は、解熱鎮痛薬0.57%（約51万人）、精神安定薬0.43%（約38万人）、睡眠薬0.09%（約8万人）と推計された。
- 7) 違法薬物：違法薬物の生涯経験率（者数）

は、大麻1.4%（約128万人）が最も高く、有機溶剤0.9%（約82万人）、危険ドラッグ0.5%（約43万人）、MDMA0.3%（約27万人）、覚醒剤0.3%（約24万人）、ヘロイン0.3%（約23万人）、コカイン0.2%（約22万人）、LSD0.1%（約13万人）と推計された。過去1年経験率（者数）は、大麻0.14%（約13万人）、ヘロイン0.10%（約9万人）、危険ドラッグ0.09%（約8万人）、LSD0.08%（約7万人）、コカイン0.08%（約7万人）、MDMA0.08%（約7万人）、覚醒剤0.06%（約5万人）、有機溶剤0.04%（約4万人）と推計された。ただし、大麻とヘロイン以外の過去1年経験率は、統計誤差範囲内であった。

- 8) 大麻：2019年から2021年にかけて過去1年経験者数が増加した（2019年：約9万人、2021年：約13万人）。大麻使用者の過半数は「国内のみ」で使用されていた。使用された形状は、乾燥大麻や大麻樹脂に加えて、ワックス・リキッドタイプ、大麻成分を含有する食品の使用者も報告された。

E. 結論

新型コロナウイルス感染症が猛威を振るう中、第14回目の全国住民調査が実施された。2019年から2021年にかけて一般住民の飲酒、喫煙、医薬品、違法薬物の使用状況に様々な変化がみられ、経年的な変化において新型コロナウイルス感染症が影響している可能性が示唆された。今年度の新たな試みとして、医薬品（解熱鎮痛薬、精神安定薬、睡眠薬）の乱用経験、および大麻の使用場所、使用形状に関する実態を明らかにすることができた。

F. 研究発表

1. 論文発表

- 1) Shimane T, Takahashi M, Kobayashi M, Takagishi Y, Takeshita Y, Kondo A, Omiya S, Takano Y, Yamaki M,

- Matsumoto T: Gender Differences in the Relationship between Methamphetamine Use and High-risk Sexual Behavior among Prisoners: A Nationwide, Cross-sectional Survey in Japan. *J Psychoactive Drugs* 2021 May 12: 1-9, 2021. Online ahead of print.
- 2) Shimane T, Inoura S, and Matsumoto T: Proposed indicators for Sustainable Development Goals (SDGs) in drug abuse fields based on national data in Japan. *Journal of the National Institute of Public Health* 70(3): 252-261 2021.8.
 - 3) Matsumoto T, Usami T, Yamamoto T, Funada D, Murakami M, Okita K, Shimane T: Impact of COVID-19-related stress on methamphetamine users in Japan. 2021 Apr 19; 10.1111/pcn.13220. doi: 10.1111/pcn.13220 Online ahead of print.
 - 4) 嶋根卓也 : 新型コロナウイルス禍の薬物依存への影響. *Frontiers in Alcoholism*9(2) : 52-56, 2021.7.
 - 5) 嶋根卓也 : 依存性薬物に関する教育の今とこれから. *保健の科学* 63(8) : 513-518, 2021.8.
 - 6) 嶋根卓也 : 違法薬物に限らない薬物依存の現状: 処方薬と市販薬の乱用・依存. *刑政* 132(10) : 12-21, 2021.10.
 - 7) 嶋根卓也 : 市販薬乱用・依存の実態とその課題. *臨床精神薬理* 24(12):75-84, 2021.12.
 - 8) 嶋根卓也 : 第2章-4 性的マイノリティと薬物依存症および感染症. やってみたいくなるアディクション診療・支援ガイド アルコール・薬物・ギャンブルからゲーム依存まで (松本俊彦編著), 金剛出版, 東京, pp300-304, 2021.9.
 - 9) 嶋根卓也 : SMARPP-24 物質使用障害治療プログラム 集団療法ワークブック [改訂版] (監修: 松本俊彦, 今村扶美, 近藤あゆみ) 金剛出版, 東京, 2022.1.
 - 10) 猪浦智史, 嶋根卓也, 加藤隆: 物質使用障害者に対する生活習慣病予防プログラムに関する予備的研究. *日本アルコール・薬物医学会雑誌*, 56(5)151-166, 2021.
 - 11) 湯本洋介, 嶋根卓也 : ジェネラリストのための LGBT 講座 第 16 回物質使用障害と LGBT. *治療* 103(7) : 2-6, 2021.7.
- ## 2. 学会発表
- 1) Shimane T et al.: Relationship between drug recidivism and the severity of problems related to drug use among male and female prisoners: A nationwide, cross-sectional survey in Japan. *Asian Criminology Society 12th Annual Conference*, web,18-21 June 2021.
 - 2) Shimane T: Understanding and support for marijuana using youth in Japan. 2021 International symposium on prevention and counseling of drug abuse for juveniles, Ministry of education, Republic of China (Taiwan), November 11-12 2021.
 - 3) Shimane T: SDG3.5 Indicators for prevention and treatment of substance abuse in Japan. The 80th Annual Meeting of Japanese Society of Public Health, Tokyo (web), December 21-23 2021.
 - 4) 嶋根卓也 : 薬物依存と「選択」のストーリー. シンポジウム 4「薬物の与えるインパクト: 選択」. 2021 年度日本アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 三重 (オンライン), 2021.12.18.
 - 5) 嶋根卓也, 高橋 哲, 小林美智子, 高岸百合子, 竹下賀子, 近藤あゆみ, 大宮宗一郎, 高野洋一, 山木麻由子, 服部真人, 松本俊彦: 覚醒剤事犯者の危険な性行動および覚醒剤の使用動機. 第 35 回日本エイズ学会学術集会, 東京 (オンライン), 2021.11.21-12.20.
 - 6) 引土絵未, 嶋根卓也, 小高真美, 秋元恵一郎, 加藤 隆, 栗栖次郎, 栗坪千明, 山村りつ, 吉野美樹, 松本俊彦: 依存症者の就労

- 支援に関する研究：就労支援機関を対象とした依存症者の就労に関する実態および意識調査. 2021年度日本アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，三重（オンライン），2021.12.18.
- 7) 猪浦智史，嶋根卓也，近藤あゆみ，米澤雅子，松本俊彦：回復支援施設におけるアルコール依存症者の予後に関する研究. 2021年度日本アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，三重（オンライン），2021.12.18.
- 8) 喜多村真紀，嶋根卓也，服部真人，高橋 哲，竹下賀子，小林美智子，松本俊彦：薬物使用のトリガーとしての月経前症状と薬物関連問題重症度の関係について. 2021年度日本アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，三重（オンライン），2021.12.19.